

〔報告〕

## University of Ottawa 研修記

渡 邊 晶 規<sup>1</sup>

本学の在外研修制度を利用して、2019年9月から2020年4月までの約8ヶ月間、カナダのUniversity of Ottawaで過ごして参りました。本学の研修制度における長期研修は通常1年間となっているところ（2020年現在）、なぜ8ヶ月という中途半端な期間であったのか？ そうです。皆さんご存知のCOVID-19の世界的な大流行の影響を受け、帰国勧告をいただき、急遽研修を中断し帰国した為です。生活、研究環境に慣れて来、これからというところで予期せぬ帰国となり、やり残した事も多々ございますが、ここにご報告させていただきたいと思えます。

オタワはカナダの首都であり、オンタリオ州に属します。カナダ最大都市のトロントも同じくオンタリオ州で、少しややこしいのですが、州都はトロントになります。カナダの公用語は英語とフランス語ですが、州毎（準州含）に公用語が定められています。国と同様に英語とフランス語を公用語としているのはニューブランズウィック州のみであり、多くの州では英語のみが公用語とされています。オンタリオ州の公用語は英語ですが、すぐ隣のケベック州の公用語はフランス語であることから、オタワではほぼ全てが両言語で表示されています。フランス語を第一言語としている方も多く、非常に多く

の市民がバイリンガルです。小学校でも英語とフランス語の両方を学んでいます。カナダはフランスとイギリスにより開拓された歴史がありますが、1854年の首都選定の際に、フランス勢力（ケベック、モントリオール）とイギリス勢力（トロント、キングストン）が激しく競いあったそうです。その結果、英仏両勢力のほぼ境界に位置したオタワが、当時は非常に小さな町だったそうですが、ビクトリア女王の独断により首都に選ばれたそうです。私がお世話になった研究室のメンバーの半数以上がfrancophone（フランス語を第一言語とする者）でした。この為、毎週ミーティングをしていましたが、意見交換が白熱してくると言語が切り替わることもしばしばで、英語もままならない私には完全なお手上げ状態でした。ただ、フランス語は日本語と舌の使い方、発音の仕方が類似しているらしくfrancophoneの話す英語は日本人にとって聞き取りやすいという利点もあったようです。実感した部分はありますが、それでも大苦戦でした。

オタワで最も有名なのが世界一の長さを誇る天然スケートリンク（図1）ではないかと思えます。氷結したリドー運河は全長7kmにも及び週末に限らず多くの人で賑わいます。通勤通

1 名古屋学院大学 リハビリテーション学部  
E-mail: m.wtnb@ngu.ac.jp

Received 22 December, 2020  
Accepted 24 December, 2020



図1 凍ったリドー川とスケートを楽しむオタワ市民

学で利用する方もいるぐらいです。私もシーズン中に何度もスケートを楽しみましたが……とにかく寒いです。こちらの冬を生活して実感したこととして、上着についているフードは単にファッション性を高めるものではなく、防寒対策として必要なものだということです。日本では（少なくとも東海圏では）防寒の為にフードを被って歩かれている方は滅多に見かけませんが、オタワではフードがあるのに被っていない方はほぼほぼ見かけることはありませんでした。ただ、私が研修したシーズンは例年に比べ

て暖かかったそうで、スタッフからは「オタワらしい冬じゃなくて残念だったね」と言われました。マイナス20度を下回る日は例年の半分程度、5日間程でしたので、確かに暖かかったかもしれませんが。全く残念ではありませんでしたが。

私がお世話になったオタワ大学は国内3番目の規模を誇る総合大学で、複数の学部と多彩なコースで構成されています。キャンパスはオタワ市内に3つあり、日本と同じく医学部は病院に併設されたキャンパスでした（図2）。



図2 左が医学部棟，右またその奥に続くのがGeneral Hospital。

私がお世話になった Bone and Joint Research Laboratory は医学部の建物内にありましたが、費用等の問題もあり所属としては病院の研究部門（Ottawa Hospital Research Institute）に在籍していました。研究室の主たるメンバーは今回研修を受け入れて下さった Guy Trudel 教授をはじめ、同じくオタワ大学の biology 専攻の准教授とその大学院生、関連病院の Medical Doctor（リハ医）、Physical therapist 各1名に、Research Associate 1名とラボの元教授の7名でした。Guy Trudel 教授は私が研究テーマとしている不動化による関節の変化に精通しているだけでなく、ここ10年程は宇宙空間における骨髄の変化にも取り組んでおられ、CSA（Canadian Space Agency）、JAXAとも共同研究をされている世界的に著名な研究者のお一人

です。手紙1枚で見ず知らずの私からの研修の申し出を快諾して下さいたことは今でも不思議ですが、彼には本当に感謝しています。ラボの運営は先ほど少し触れましたが、毎週火曜日に行われるミーティングが軸となっていました。私はここで毎回進捗状況をプレゼンテーションさせていただいていましたが、皆さん本当に拙い英語を根気よく聞いて下さったなとは思いますが、またミーティング後に文書で確認してくれたスタッフには感謝しきりです。実際の研究活動自体は個人で進めることがほとんどでしたので、日によっては挨拶以外に英語を口にしないこともありましたが、その点においては少し残念ではありました。

具体的な研究テーマは関節不動化による関節軟骨の骨置換が①いつから起こるか？ ②どの

ようにして起こるか？ ③そしてそれは可逆的か？という課題に取り組んで来ました。実験の対象はラットでしたが、動物を飼育するところから自分で行くことは時間的にも制度的にも難しく、既に保管されていた Tissue bank を利用させていただきました。大量の組織標本を染色・観察し、画像上で計測をし……これほど1日中日を酷使したのは大学院生の時以来だったかもしれません。結果を報告しては、別の方法で再計測、これを追加、あれを追加と何度もやり直しになったことも若かりし頃を思い出させてくれるものでした。1月には University of Ottawa Physiatry Day というリハビリテーションに関わる臨床家、研修医が集まる集会で口頭発表させていただく機会をいただきました。50名程の小さな集会ではありましたが、顔色が悪く体調を心配されるほどに緊張しました。結果は案の定、散々なもので、座長をはじめ温かい言葉をかけて下さる先生方の優しさは心に刺さるものでした。この経験を糧に、5月に開催される Canadian Association of Physical Medicine & Rehabilitation の Annual Meeting にて少しでもスタッフの皆さんに成長を見せたいと思っていましたが、冒頭述べた COVID-19 の影響により学会は中止となり、その想いは実現することなく終えてしまったことはとても残念に思われます。またいつの日にかご指導いただいた感謝の証として発表者席にいる姿を見せることが出来ればと思っています。

オタワで COVID-19 影響が顕著になったのは3月の中旬以降でした。オタワで初の陽性事例が出たのが10日前後、わずか1週間後の17日にはオンタリオ州に非常事態宣言が出されました。この間に WHO によるパンデミックの宣言があったこともあるとは思いますが、急速に街の状況が変わりました。大学の対応は凄く

早いもので、2日間の臨時休校の後、すぐに全ての科目がオンライン授業に切り替わっていました。この頃から大学のラボも不要不急の活動は制限され、ミーティングはオンラインで継続できるものの、実質的な研究活動は制限されてしまう形となりました。ちょうど1つ目の研究テーマに区切りがつき、次のテーマに移行するところでしたから、不幸中の幸いとも言えなくはないタイミングではありましたが、欲を言えばもう少し……欲を言えばキリがないわけですが、次の研究テーマのデータを集めるところまで流行の拡大が待ってくれればと悔やまれました。オンラインでのミーティングは対面で話すよりも言語による壁が高くなるように感じ、最初は非常に苦手意識ばかりが心の内を占め、文明の利器を恨めしく思うこともありましたが、このおかげで帰国後もコミュニケーションを取って研究成果をまとめることが出来ましたし、引き続き一部の研究に携わらせていただくことが出来ました。

予定されていた期間を全うすることは出来ませんでした。学術的な側面はもちろん、むしろそれよりも生活の全てから多くの事を吸収できた貴重な時間となりました。「四十にして惑わず」と言いますが、生活環境が変わり、家族と過ごす時間も増え、自身の無力を痛感し、迷いや悩みに溢れてはいましたが、だからこそ今まで以上に全てのことに感謝を覚えることが出来たように思います。貴重な機会を与えて下さった名古屋学院大学の皆様に深謝申し上げます。

最後に余談ではありますが、私が在外研修に行かせていただいた期間は、まさに厄年真っ只中でした。応募の際に気が付いていたら……世界的な厄と重ならずにすんでいたかも、なんて思ってしまいました。これから研修に出られる先生方で気にされる方はご注意ください。